

デズデモーナの愛と死:
『百物語』『オセロー』から『能・オセロー』へ
The Love and Death of Desdemona

畑江 美佳

HATAE Mika

Othello, one of the four tragedies that Shakespeare wrote, explores a personal love between Othello and Desdemona. Othello is a black general in the service of Venice, and Desdemona is a young, fair, white lady who loves Othello deeply. Although they love each other very much, Othello falls into a trap set by the villain Iago and kills his love. Therefore, we cannot help but feel the great vanity coming from her death at the end. This paper explores the cause of this vanity from the study of the original text *Hecatommithi* written by Giraldi Cinthio. Moreover, to combine this Shakespearean play with Noh in Japan, her death must be purified and their love must reach to the terminus.

1. はじめに

『オセロー (*Othello*)』はシェイクスピア (William Shakespeare) の四大悲劇の一つである。他の三つの悲劇作品と比較すると、『オセロー』は非常に個人的な恋愛の悲劇を扱っている。黒人将軍 Othello が白人の若く美しい良家の娘 Desdemona と深い愛情で結ばれるが、部下 Iago の巧みな罠にはまり、彼女の不貞を疑い始める。愛と嫉妬に苦しむ Othello の内的葛藤、純粋に彼を愛し続ける Desdemona の悲しみと混乱、そして Othello が Desdemona を絞殺し、その後彼女の潔白を知って自害するまでが描かれている。

最後の場面で我々が感じるのは言葉で言い表せないような「空虚感 (vanity)」である。愛し合いながらも互いに和解できぬまま死んでいった二人の亡骸を前に、舞台はあっけなく幕を閉じる。このときの感情を我々はどう受け止め、どこへ納めればよいのだろうか。

本稿では、シェイクスピアの『オセロー』に登場する Desdemona の愛と死に焦点をあて、

シェイクスピアが原典として取り上げたといわれている『百物語 (*Hecatommithi*)』⁽¹⁾にこのカタルシスなき結末の原因を求め、シェイクスピアの『オセロー』との主題の相違点に着眼し論ずることとする。さらに、この「空虚感」の行き場を『能・オセロー』における「夢幻能」の中に見出してみたい。

2 . Othello の深層心理

優しく美しく従順な Desdemona が、白人の富める貴公子との縁談を断り続けて、黒人将軍の Othello と駆け落ちしたという事実は、周りの者を驚かせる。結婚に大反対する父親に対して、彼女は堂々と打ち明ける。

My heart's subdu'd
Even to the very quality of my lord:
I saw Othello's visage in his mind;
And to his honours and his valiant parts
Did I my soul and fortunes consecrate. ⁽²⁾ (I, iii, 250-254)

もとより夫の天職そのものに心をひかれてのことではございます。この身にとりましては、オセローの真の姿はその心にこそ、その名誉と雄々しい働きとに身も心も捧げた私にございます。(福田恒存)

しかし、彼女の愛が強い信念の上に築かれているのを Othello が理解していないことは、次の言葉で明確になる。

She lov'd me for the dangers I had pass'd;
And I lov'd her that she did pity them. (I, iii, 167-168)

あれは私が過去に冒した難難ゆえに私を愛してくれたのであり、私はあれがそういう私の身の上をあわれんでくれた心根ゆえにあれを愛したのでございます。(福田)

戦に明け暮れてきた勇敢な軍人 Othello は、地位も名声も余すことなく手に入れたが、こと恋愛に関してはあまり得意としていたとは言えないようだ。それは、次の場面での彼の言動に顕著に表れている。

Othello は Desdemona とサイプラス島で再会した際、“O my fair warrior! (「おお、美しき戦友！」訳：福田)” と呼びかけている (II, i, 179)。普通の女性であれば、もう少しロマンチックな呼ばれ方を期待するのではないだろうか。しかし、Desdemona は、不満をもらすどころか、“unhandsome warrior as I am (「こうして戦のお供をさせてもらいながら、その値うちもない」訳：福田)” (III, iv, 155) と、後に自らを“warrior”と呼ぶのである。ここに、軍人の妻としての Desdemona の固い意志と、Othello との間に精神的な強い絆を求めていることがうかがえる。

彼女は彼の武将としての男らしさや勇ましさを心から愛しているのだが、当の Othello は彼女の愛の深さに気づいていない。彼は、自分の肌の色が黒いことや、他のヴェニスの男たちのように、女性の慇懃な扱い方に長けていないことにコンプレックスを抱えている。Desdemona に心から愛されていると信じているつもりでも、自分でも気づかぬ深層の部分では絶えず不安が渦巻いている。それは、「Desdemona のように若く美しい女性が、自分のような中年の、そのうえ肌の色も違う男を心底愛しているはずがない。自分は彼女に選ばれたが、それは女性の一時の気まぐれであったのかも知れない」という不安である。Iago の比類稀に見る悪魔的策略にかかっては、いかに強い人間であっても理性を失い墮落してしまうかも知れないが、それ以前から Othello の中に不安の種が宿っていたことは確かである。Iago の先天的邪悪の本能がそれを嗅ぎつけ、その小さな種を手のつけられないほどの大きな嫉妬へと増殖させたのである。

Nor from mine own weak merits will I draw
smallest fear or doubt of her revolt;
For she had eyes, and chose me. No, Iago;
I'll see before I doubt; when I doubt, prove;
And, on the proof, there is no more but this,
Away at once with love or jealousy! (III, iii, 189-194)

もちろんおれ自身の弱点を物差しに、あれが裏切りはせぬかなど、そのような危

惧はつゆ懐いたこともない、おれを選んだあれの目を信じているからだ。見そこなうな、イアゴ、おれはまずこの目でみる、見てから疑う、疑った以上、証拠を掴む、あとは証拠しだいた、いずれにせよ、道は一つ、ただちに愛を捨てるか、嫉妬を捨てるか。(福田)

気品と強さを兼ね備えた、しかし恋は不得手で実直な男、Othello の心の揺れ動きが、この台詞の中に絶妙に描かれている。

3 . Desdemona の愛の結末

その一方で Desdemona の魅力は劇の後半で徐々に我々の心をつかみ始める。Othello の変貌の理由を自分の落ち度のためだと嘆く姿はけなげではあるが、その従順さにもどかしささえ感じる。

'Tis meet I should be used so, very meet.
How have I been behaved, that he might stick
The small'st opinion on my least misuse? (IV, ii, 108-110)

当たり前なのね、こんなふうにされるのも、ごく当たり前のことなのだわ。私は何をしたのだろう、あのささいな過ちがあの人にはなにか意味があるのかしら？(福田)

Othello に「売女」呼ばわりされ打たれるようなむごい仕打ちをされても、それでも Desdemona は彼を愛していると言い続ける。

Or that mine eyes, mine ears, or any sense,
Delighted them in any other form,
Or that I do not yet, and ever did,
And ever will, though he do shake me off
To beggarly divorcement, love him dearly,
Comfort forswear me! Unkindness may do much;

And his unkindness may defeat my life,
But never taint my love. (IV, ii, 155-162)

主人以外のおその男に心を奪われ、この目、この耳が、すこしでも官能の喜びを味わいでもしたというのなら、そう、あの人はいつか、私を乞食のようにみじめに捨ててしまうかもしれない、だからと言って、あの人を愛さぬような私なら、今まででもこれから先も、そんな心根の私なら、どうなろうと厭いませぬ、この身からあらゆる楽しみを剥ぎとってしまってくださいまし！辛く当たられるのが何より悲しい。あの人に辛く当たられると、まるで身を斬られるよう。でも、私の愛情は変わらない。
(福田)

我々は Desdemona の中に、従順さだけではない強靱な強さも徐々に認めることになり、それと同時に Othello に対しての憤りはますます募る。Desdemona は精神に不調をきたし始め、自分の死を予感したかのような言葉を口にし、自分の末路を悟ったかのように歌う「柳の唄」(4幕3場 44-60) が我々の心を締め付ける。どうか Othello の誤解が解けるように、と願わずにはいられない。手遅れになる前に。しかし、その願いは叶わず、ついに Othello は Desdemona を絞殺するに至る。

Nobody: I myself. Farewell;
Commend me to my kind lord: O, farewell! (V, ii, 127-128)

誰でもない、自分の手で。さようなら、旦那様によろしく、ああ、さようなら！(福田)

死の淵にあっても Desdemona は Othello をかばう。この言葉に、彼女の愛が真の愛であったことを改めて確認させられ、我々は激しいショックを受けるのである。

この時の Desdemona について、笹山隆氏は「彼女をなかば殉教者的な犠牲者に見えしめることになる」⁽³⁾ と言う。真実を知った Othello が死をもって彼女の愛に報いたといっても、その犠牲があまりにも大きいためどこか納得のいかない思いが残る。これについて、大山敏子氏は次のように述べる。

この芝居は『嫉妬の悲劇』であると言っても、また、正直で善良なオセローが悪役イアゴウに敗れて、『愛』が『死』に変わってしまったと説明しても、われわれには十分納得がいかない。『死』によって、より強く、より輝かしくかかげられた二人の『愛』の勝利と説明してみても、われわれの心に残るむなしさに似たものを如何ともしがたい。(4)

4. 『百物語』と『オセロー』 主題の相違

この二人の最期の場面を、どう受け止めればよいであろうか。ここで注目したのは、シェイクスピアの作品に、ほとんどと言えるほど原典が存在することである。シェイクスピアが『オセロー』を書くにあたっては、1566年にヴェニスで出版されたイタリア人作家チンツィオ(Giraldi Cinthio)の『百物語』第3篇第7話を原典として取り上げたといわれている。(5)

シェイクスピアは、チンツィオの作品に相当量を依存している。デズデモーナという元の名から Desdemona を、Moor とだけ呼ばれていた黒人の軍人を “a noble Moor” Othello として登場させ、さらに、悪漢部下がハンカチに策略をめぐるところや、彼女に不貞の罪をきせて殺害してしまうところなどを、細部に渡って『オセロー』に採用している。

しかし、これら二作品の主題には大きな違いがみられる。チンツィオはもともと道徳家であり、彼の作品には実録的教訓を含むものが多数見られ、『百物語』も例外ではない。

I know not what to say of the Moor; he used to be all love towards me; but within these few days he has become another man; and much I fear that I shall prove a warning to young girls not to marry against the wishes of their parents, and that the Italian ladies may learn from me not to wed a man who nature and habitude of life estrange from us. (6)

自分でもモーロのことをどう考えたらよいのか、わからないの。これまでずっと、それはやさしくしてくださったのに、近頃、急に、どういうわけか、人が変わってしまわれた。それに、わたくしは、自分が若い人たちにとって悪い見本になるので

はないかと、とても心配なの。親の反対を押し切って結婚するものではないと。イタリア人のお嬢さんたちが、わたくしの例を見て、人種や、宗教や、生活習慣の異なる男性と結婚するものではないと思ったりしないかしら。(望月紀子)

ディスデモナのこの言葉から、この作品が異人種との結婚に警鐘を鳴らす目的のために書かれたと推測できよう。作品がこのように「教訓」を含んでいるというところに鍵が隠されているのではなからうか。ディスデモナがいかに無実潔白の身であっても、「教訓」として彼女の死は少なからず妥当性を持つことになったのではないか。つまり、「無実であっても、親の反対を押し切って異人種と結婚したことは、自分の蒔いた種であるからむごい殺され方をしても仕方がない」とみる立場である。齋藤衛氏も次のように述べる。

ディスデモナの運命には、ロジックとセンスが欠けていて、あるのはただ残酷な空しさばかりである。彼女が涙とともに言う、親類縁者を無視し、“la Natura, et il, Ciero, et il modo (自然、風土、習慣)” を無視した結婚などすべきものではない、という『教訓』の前に頭を垂れて小説は終わるのであろうか。そのように主題を見る論者は少なくない。(7)

一方、シェイクスピアの『オセロー』の主題は結婚にまつわる「教訓」ではない。高潔だが弱さを持つOthelloと、死に際においても彼を愛し続ける強さを持つDesdemonaは、ともに人間味溢れる魅力的な人物に生まれ変わり、彼らの心理的葛藤が見事に描写されている。シェイクスピアは、「もともと単に哀れを誘うだけの家庭悲話に過ぎなかったものを、人間性の墮落と瓦解を核とする壮絶なドラマとして生まれ変わらせた」(8)のである。この物語は単なる「教訓物語」からスケールの異なる「恋愛悲劇」へと成長を遂げたのだ。

そこでつじつまが合わなくなるのが、Desdemonaの最期である。シェイクスピアが二人の恋愛に焦点を当てたために、原典とは全く異なる感情をもって彼女の死に直面することになってしまったのだ。「教訓」であれば納得できる最期が、「恋愛」の最期としてはあまりにもあっけない幕切れのために、我々は言葉に表せないような不条理を感じてしまうのである。これでは他の三つの悲劇の結末にみられるカタルシスが全く感じられないのも当然である。

5. 「夢幻能」に答えを求めて

チンツィオのデズデモーナは向こう見ずな結婚によって哀れな最期を遂げた一女性でしかなかったが、シェイクスピアによって Desdemona は純粹無垢で意志を貫く強さをも兼ね備えた魅力的な女性へと成長を遂げた。それゆえに、心から愛していた男性に誤解によって殺されてしまった彼女の魂をなんらかの方法で救ってやりたい、という衝動が我々を支配する。

これに対する一つの答えを、上田邦義氏は自身が作、節付け、演出をする『能・オセロー』の中に見出している。シェイクスピアの原文を日本古来の能の節と舞いによって表現する斬新な試みを、氏は三十余年研究している。後場で、「オセローの再登場、痛恨の謡(第5幕第2場)があると、下り端でツレのデズデモーナが姿を見せる。これはオセローの心に映じた亡霊である。二人は再会の喜びを早舞で演じ、愛を語り合う(第2幕第1場)が、互いに手に手を取り合おうとするところ、『隅田川』の塚の中から現れる梅若丸の亡霊の型のすれちがいに終わって、ツレは幕に消え、夜が明けて夢破れたオセローの祈りの声のみが残るという地謡の結句(原作にない)で終わりとなる」。(9)この場面の創作について、上田氏は次のように述べている。

I wanted to allow Othello, who repents fully, to be led to heaven by the ghost of Desdemona as my spectators expected. I did this, believing that the main purpose of Noh is, as Zeami said, 'to serve as a means to pacify people's hearts and to move the high and low alike'. (10)

私は、観客が期待したように、十分に後悔しているオセローをデズデモーナの霊によって、天国へ導かせてやりたかった。私がこのように最後の場面を変えたのは、世阿弥が述べているように、能の主たる目的が「人々の心を沈め、あらゆる階級の人をも同様に感動させる手段として努めること」だからである。(訳：畑江)

上田氏は、Desdemona の報われなかった愛と、Othello の悔恨を、世阿弥の考案した「夢幻能」の中で舞うことによって、浄化させているのである。このように、『能・オセロー』では、精神性の高い能という日本古典文化の中で、二人が死後に真の和解を得る、という

結末を与えている。能面に秘められた穏やかな表情のデズデモーナに、彼女の愛がここに成就したことを知り、我々の心の中にあっただうしようもない「空虚感」が消え失せていくのを感じることができる。

「夢幻能」にみられる「死後の命」という精神的観念は、どの文化にも見られる普遍的なものである。それは、死後の生命という考え方があらゆる時代のあらゆる文化圏に存続してきたという歴史的事実に基づくものである。古代エジプトは言うに及ばず現代のアメリカ、アフリカの未開部族やアラスカ・エスキモー、さらにはインドのヒンズー教徒また日本の神道信者や仏教徒の間でも、来世信仰は脈々たる生命を保ってきたのである。⁽¹¹⁾ よって、『能・オセロー』は、「死後の命」つまり人類普遍の問題を扱っているため、能に通ずる日本人に限らず、あらゆる文化圏の人々にも受け入れられることとなる。

6. おわりに

以上のように、シェイクスピアの『オセロー』で、Desdemonaの死が我々に与える「空虚感」は原典『百物語』における元来の主題との相違から生じたものではないかと推測してきた。そして、その「空虚感」を埋めるための一つの答えを、『能・オセロー』での「夢幻能」の中に求めた。

Desdemonaの中に、我々は理想の愛を見出し、いつしか自分の体験に重ね合わせているのではないだろうか。だからこそ、彼女には「死んで欲しくない」のである。『人を愛するとはこう言うことだ 汝、汝死すべからず と』はマルセルの有名な言葉だが、愛する者の死に際して、これほどの深い言葉があるだろうか。アルフォンス・デーケン氏はこう述べる。「愛する者の死に接して相手の消滅を思うならば、我々はこの愛に『背信』を犯したことになる。逆に、相手の死後の生命を確信することが真正の愛の証になる」⁽¹²⁾ と。

Desdemonaは、一つの曇りもない心でOthelloを愛した。そして死んでいった。彼女の愛が報われない結末など、人を愛したことのある人間であれば誰一人望みはしないであろう。チンツィオの『百物語』の中のデイスデモーナ、シェイクスピアの『オセロー』の中のDesdemona、上田邦義氏の『能・オセロー』の中のデズデモーナ。彼女は作品の中で美しく進化し続けている。

註

- 1 . 原典はイタリア語。Giraldi Cinthio, *Gli Hecatommithi 2 vols*, published in Venice by Scotto, Girolamo, 1566
- 2 . 使用テキストは、*Othello*, ed. Wilson, John Dover, Cambridge University Press, 1957
- 3 . 笹山隆、「オセローにおけるカタルシスの構造」『シェイクスピア全作品論』、研究社出版、1992年 p.280
- 4 . 大山敏子、「シェイクスピアと愛の伝統」、研究社出版、1976年 p.178
- 5 . 『百物語 (*Hecatommithi*)』の英訳は、translated by Taylor, J.E., 1855, Kernan, Alvin, *The Tragedy of Othello, The Moor of Venice*, Penguin Books, 1986, pp.171-184。邦訳は、望月紀子訳、「百物語 (エカトンミーティ) 抄」、河島英昭編、『澁澤龍彦文学館 ルネサンスの箱』、筑摩書房、1993年 pp.261-277。
- 6 . Kernan, Alvin, translated by Taylor, J.E., 1855, *The Tragedy of Othello, The Moor of Venice*, Penguin Books, 1986, p.179
- 7 . 齋藤衛、『シェイクスピアと聖なる次元』、北星堂、1999年 p.215
- 8 . 笹山隆編、『大修館シェイクスピア双書 オセロー』、大修館出版、1989年 p.9
- 9 . 鳴海四郎、「『能・オセロー』を見て」『能・オセロー 創作の研究』、勉誠社、1998年 p.99
- 10 . Kuniyoshi Ueda, *Noh Adaptation of Shakespeare Encounter and Union*, Hokuseido, 2001, pp.240-241
- 11 . アルフォンス・デーケン、「死にまさる生命 人間の永遠の次元」『未来の人間学』、理想社、1981年 p.42
- 12 . 同上、p.46

参考文献

- 上田邦義、『能・オセロー 創作の研究』、勉誠社、1998年
- 大山敏子、『シェイクスピアと愛の伝統』、研究社出版、1976年
- 河島英昭編、『澁澤龍彦文学館 ルネサンスの箱』、筑摩書房、1993年
- 齋藤衛、『シェイクスピアと聖なる次元』、北星堂、1999年
- 笹山隆、『シェイクスピア全作品論』、研究社出版、1992年
- 笹川隆編注、『大修館シェイクスピア双書オセロー』(William Shakespeare, *Othello*)、大修館、1989年
- 世阿弥、『風姿花伝』、岩波書店、1958年
- デーケン、アルフォンス、中村友太郎編、『未来の人間学』、理想社、1981年
- 福田恒存訳、『オセロー』(William Shakespeare, *Othello*)、新潮社、1973年
- 福田陸太郎・菊川倫子、『人と思想 シェイクスピア』、清水書院、1988年
- 宗方邦義、『シェイクスピア名場面集・ハムレットとオセロー』、北星堂書店、1979年
- Kernan, Alvin, *The Tragedy of Othello, The Moor of Venice*, Penguin Books, 1986
- Shakespeare, William, ed. Wilson, John Dover, *Othello*, Cambridge University Press, 1957
- Ueda, Kuniyoshi, *Noh Adaptation of Shakespeare Encounter and Union*, Hokuseido, 2001